園だより ～きづき

キ３園　　第 42 号
R８年８月１日
キッドワールドサード保育園
園長　　是永　妃富

８月になり、夏本番を迎えました。毎日暑い日が続いていますが、子ども達は水遊びやプール遊びを楽しみながら、元気いっぱい過ごしています。暑さで疲れがたまりやすい時期でもありますので、一人ひとりの体調に気を配りながら無理なく夏の遊びを満喫したいと思います。ご家庭でも生活リズムを整え体調管理にご協力をお願い致します。

また、今月はお盆がやってきます。出かけたりすることも多いと思いますが、事故や怪我のないようにお過ごしください。

８月行事予定

７日　（金）身体計測
20 日（木）健康診断
２０日（木）避難訓練
31 日（月）プール・水遊び終わり

お弁当日は
14 日(金)です






プール遊びを楽しんでいます。入れないお友達は室内で過ごしています

★お知らせ・お願い★

・毎日プール遊びの準備ありがとうございます。チッエック表の記入を忘れずにお願い致します
・持ち物には名前の記入をお願いします。消えたら書く、を忘れずにお願いします。
・保護者の方の１日保育士体験を受け付けます。希望の方は担任に声をかけてください。
・9/12(土曜日)は、お祭りごっこを行います。(詳細については、後日お知らせします)
・県内ではコロナ感染症が流行しているようです。手洗い、うがい等を行いましょう。

クラスの様子

0 歳児さん

新しいお友達が増えて5人になりました。歩行ができたり、ハイハイをしたり少しずつ大きくなっています



1 歳児さん

プール遊びや水遊びでは泣き声から笑い声にかわってきました。体を動かし、よくお昼寝をしています。



2 歳児さん

とっても水遊びや、プール遊びを楽しんでいます。「楽しかった」と言ってプールから出てきます。パンツになったお友達も増えました。





キッドエッセイ 82

子どもが望む大人の世界⑩～18 の子どもの願い～

牧野　桂一先生

子育ての参考をかいてくれています。お読みください



前回までに紹介しきれなかった⑯番目にあたる「子どもの名前をいっぱい呼んであげる」の項目以下について、今回も同じように紹介していきたいと思います。

最初に、子育てにおける「子どもの名前を呼ぶ」ということについて考えていきます。子育ての中で「子どもの名前を呼んであげる」ということは、ここで起こる相互のコミュニケーションから子どもの心を育てることや家族関係、社会性を育む上で非常に深い教育的・心理的な意味が生まれてきます。そこで、ここでは子育てにおいて「子どもの名前を呼んであげる」という何気ない行為から生まれてくる具体的な意味について考えていくことにします。

まず一番目の意味としては、「子どもの名前を呼んであげる」と子どもの中に 自己肯定感と「愛されている」という実感が育ってきます。名前は、子どもが生まれて初めてもらう「人生最初の大切な贈り物」であり、その子自身のアイデンティティそのものということができます。

親が愛情を込めて自分の名前を呼んでくれることで、子どもは「自分は大切な存在なのだ」「このままの自分で全てが受け入れられているのだ」という深い安心感と信頼感を得ることができます。ここで生まれる自己肯定感と自尊感情は、将来いろいろな困難に直面したときに立ち直る力の土台となります。失敗をしたときに諦めずにもう一度挑戦する力を養います。

二番目に、「子どもの名前を呼んであげる」と社会性と人間関係、コミュニケーションの基礎を身につけることができます。名前を呼ばれてパッと顔を向け、目と目を合わせてアイコンタクトを取るというやり取りは、すべての人間関係の原点になります。「呼ばれたら返事をする」「相手の方を見る」という双方向のコミュニケーションの基礎が、毎日の呼びかけを通して自然と体に染み込みます。他の人の存在を意識し、円滑な関わりを持つための最初のトレーニングとなるのです。

三番目に、「子どもの名前を呼んであげる」と主体性と自主性が育ち「自分」という自我の意識が芽生えます。「〇〇ちゃん、どうしたい？」と、名前を添えて語りかけられることで、「僕は(私は)、林檎を食べたい」と子どもは、主語を自分として捉えて放すことができるようになるのです。集団の中の一人ではなく、「自分という独立した個人の意見や意思を尊重されている」と感じることで、自立心や自律心、主体性が育ちます。そして、自分の行動に対して責任を持つ感覚の芽生えにもつながるのです。

四番目に、「子どもの名前を呼んであげる」と情緒の安定を育て心のセーフティネットを作ることになります。不安なときや寂しいとき、あるいは叱られたあとに自分の名前を優しく呼んでもらうことは、子どもの心をクールダウンさせる大きな力になり、癒にもなります。言葉の持つ温かさがダイレクトに子どもに伝わり、「いつでも、どこでも自分を見守ってくれている人がいる」という心のセーフティネットをしっかりと自覚し、親子の愛着の絆を強固にします。

一方で、「子どもの名前をいっぱい呼んであげる」ことが、子どもの脳にどのような影響を与えているかということを考えると、名前を呼んであげることは、単なるコミュニケーションを超えて、子どもの脳の成長や神経回路の発達に科学的なとても良い影響を与えていることが分かります。

脳科学や発達心理学の視点から見ると、名前を呼ばれるという経験は以下のような影響を脳にもたらします。

一番目として、「自分」を認識する脳の領域（自己ネットワーク）を育てることになります。脳には、自分自身に関する情報や感情を処理する「デフォルト・モード・ネットワーク（DMN）」と呼ばれる神経回路の基盤があります。赤ちゃんや幼児期から自分の名前を繰り返し耳にすることで、脳は「この音（自分の名前）が聞こえたときは、自分に注意を向け、自分の感覚を処理するんだ」と学習します。これにより、「自分という存在（自己意識）」を認識する大脳の働きがスムーズになり、他者と自分を区別する認知の土台が作られるのです。

二番目として、言語を司る脳の領域（ウェルニッケ野・ブローカ野）への刺激が働きます。親が子どもの名前を呼んで話しかけるとき、子どもの脳では、聴覚を司る領域や言語を理解する領域（ウェルニッケ野）、言葉を発する準備をする領域（ブローカ野）がフル回転しています。「名前＋肯定的な言葉（例：「〇〇ちゃん、大好き」「〇〇ちゃん、見て」）」というセットで大量の気持ちの良い音声シャワーを浴びることで、言葉の聞き取り能力や語彙力をつかさどるシナプス（神経回路の接続部）が密に発達します。

三番目として、「オキシトシン」が分泌され、脳のストレス耐性が高まります。親に優しく名前を呼ばれると、子どもの脳内では愛情ホルモンと呼ばれる「オキシトシン」が分泌されやすくなります。オキシトシンには、脳の恐怖や不安を感じる大脳辺縁系（扁桃体など）の過剰な興奮を鎮め、ストレスフルな状況に対する耐性を高める働きがあります。安心感に満たされた脳は、新しいことを学んだり、探索行動を起こしたりするための「安心の基地」を手に入れ、知的・情緒的な学習効率も上がります。

四番目として、脳の前頭前野を刺激し、注意力やコントロール力を高めます。

名前に反応してパッと顔を上げ、親の目を見るという一連の行動は、脳の「司令塔」である前頭前野を強く刺激します。前頭前野は、注意力、衝動のコントロール、感情の調整などを担う重要な部位です。「呼ばれたら注意を切り替えて反応する」という日常の小さな反復が、この前頭前野の神経回路を鍛え、集中力や社会性の高い脳を育てます。

このように、名前をたくさん呼んであげることは、子どもの脳に「自分は安全な場所にいて、大切にされている」という最良の栄養を与え、知性と情緒の健やかな発達を支える強力なエネルギー源となるのです。

名前を呼ぶことは、お金も特別な教材もいらない、最もシンプルでありながら最も強力な「愛情のスキンシップ」です。日常の中で意識して名前を呼んであげることは、子どもの健やかな心身の成長にとって計り知れない価値を持っています。

阿弥陀如来は「南無阿弥陀仏」と自分の名前を呼んだ人を一人残らずたすける、必ずたすけると言っています。仏様も自分の名前を呼ばれることが一番嬉しいと言っているのです。

今回もまた、紙面の都合で紹介しようと思っていた項目を全て紹介することはできませんでしたので、次に回させていただきます。次回は最後の　⑰人として美しい親になるということについて紹介していきたいと思います。

♡たくさん名前を呼んであげましょう♡











園では友達とかかわり，いろんな表情を見せてくれます